

日本社会心理学会会報

196号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科 池田研究室

2013年1月8日

日本社会心理学会第53回大会終わる

2012年度学会大会は2012年11月17日(土)、18日(日)の2日間、筑波大学を開催校として、つくば国際会議場で開催されました。実り多き大会であったこと、大会印象記からご覧になって下さい。また大会準備委員長の吉田富二雄先生、事務局を担当された松井豊先生、岡田昌毅先生、湯川進太郎先生、藤桂先生、川上直秋先生はじめ、運営委員、スタッフの皆様、まことにありがとうございました。

秋の社会心理学会大会(筑波大学) 大会印象記1

青山謙二郎

「折り入ってお話しが…」と明治学院大学の宮本聡介先生が近づいてこられたのは、大会2日目のポスター会場で長崎大学の谷口弘一先生と雑談をしていた時でした。大会の印象記を書いて欲しいとのこと。先回りして「典型的な社会心理学者ではない視点からの原稿が欲しい」と人の良さそうな笑顔で頼まれると断れませんでした。私は普段はラットを対象に条件づけの手法を用いて食行動の実験をしています。指導していた大学院生の研究テーマが人間の食行動の社会心理学的研究だったことからこの学会に入会し、今回もやって来ていたのです。興味が偏っていますが、いくつか紹介させていただきます。

初日の「感情・動機①」の口頭発表会場では面白かったのでつい色々質問をしてしまいました。スペースの都合で質問させていただいた発表のみ、私に関心を持った点を紹介します。京都大学の後藤崇志さんの発表は、効率的な自己制御を実現することを目指した研究でした。その際、認知的な変数に対して働きかけるのではなく、刺激に対する反応を報酬により強める(つまりオペラント条件づけを使う)という発想が興味深かったです。筑波大学の高田琢弘さんの研究で用いられたギャンブル課題は実際に得ができる堅実な選択肢があったことが特徴的でした。興味深かったのは、それにもかかわらず、損をする無謀な選択肢が多く選ばれていたことです。しかもマイ

ルドな運動を短時間行うことで無謀さが減っていました。これは予想に反した結果だったのですが、意外な結果ほど面白いです。一橋大学の井上裕珠さんの発表では、資源の分配容易性の効果を、実験参加の謝礼としてもらえるQuoカードが2人で分配しやすいかどうかという形で調べるという発想に感心しました。謝礼が参加者2名中1名だけに与えられるという理不尽で有り得ないような状況での行動を調べるのは、まさに実験の醍醐味のように思いました。本当は他の2件の発表も聞きたいことがたくさんあったのですが、あまり私ばかり、しかもポイントのずれた質問をしても迷惑と思って遠慮しました。やはり私は独立変数の操作を行う実験的研究にやはり興味を惹かれます。

考えさせられたのは初日のワークショップ「無意識研究の最前線」です。話題提供者は実力者ぞろい興味深く勉強になりました。普段ラット相手に研究していると、人間の行動が必ずしも意識的な行動ばかりではないという見解は抵抗なく入ってきます。むしろ疑問は「意識的な行動も重要です。」という趣旨の発言が繰り返されたことからわきました。意識的行動とは「意識(自覚)の伴う行動」という意味で使われているのだと思います。しかし意識が伴うことは意識が原因であることとは異なります。行動の原因を探求することを重視する私としては、「意識的行動」と言っても意識が伴うだけで意識が原因でないならば“無意識的行動”とあえて区別する必要は無いのでは？」とあってしまったりします。では

● 今号の主な内容

- 【1面】 日本社会心理学会第53回大会終わる 印象記
- 【3面】 第53回大会実施概要報告
- 【3面】 名誉会員推戴の記
- 【4面】 2012年度日本社会心理学会賞—第14回選考結果および受賞者の声
- 【6面】 2012年度若手研究者奨励賞の選考
- 【7面】 東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか
- 【8面】 若手会員、声をあげる
平島太郎・鬼頭美江
- 【10面】 社会心理学会を支えていた
だいている方々 その6
- 【11面】 『社会心理学研究』掲載予定
論文、会員異動

“意識的行動”は意識が原因なのでしょう
か? 実験主義者の考えでは、ある行動が生じる原因が意識であると証明するには“意識の有無”だけを操作し、意識を無くする操作により行動が生じなくなるというデータが必要です。「どうしたら純粋に意識の有無だけを操作できるか」と考えると、この証明は難しそうに思えます。ラットがレバーを押す行動の原因は何なのか、改めて考えさせられます。

2日目はポスター会場で発表を聞きました。ポスターはパネルを横に2枚だけつなげたレイアウトでしたので広々としていました。普通の学会だと何枚もパネルをつなげてしまうので、横との間隔が狭く話がしにくいのですが、このレイアウトはとても良かったです。

ポスターでもたくさん興味深い研究を聞きましたが、私の趣味で1つだけ紹介します。京都大学の栗田季佳さんが評価条件づけを通して偏見を低減する試みを報告されていました。学習心理学者としては俄然興

味がわかります。「へんけん」という文字刺激を闕下提示して「きたない」といったネガティブな意味語と連合させるという条件づけです。驚いたのはその効果が直接は条件づけをしていない「障害者」という文字刺激にも般化するということ。これは画期的だと思い、長時間ポスターの前に留まってしまう。後ろで順番を待っていた方にお詫びします。

私に質問をされた方は「なぜこの人はこんな変な質問をするのだろうか？」と疑問に思われたかもしれませんが、普段ラットの実験をしている人だったのです。お許し下さい。紹介した研究のポイントがうまく解説できていない責任は発表者でなく私にあります。これもご容赦下さい。究極的には宮本先生の人選ミスと言っても良いかと思えます。幅広いテーマが扱われており「何が社会心理学以外の心理学なのか」と疑問に思ったほど活発で刺激的でした。最後になりましたが、すばらしい大会を運営していただいた準備委員会の皆様にお礼を申し上げます。受付から発表会場に至るまで、スタッフの方々がてきぱきと働かれていて、大変快適な学会でした。

(あおやまけんじろう・同志社大学)

大会印象記2

上原俊介

つくば市を訪れるのは今大会がはじめてとなる。同じ茨城県でも水戸市には二年ほど居を構えたことがあるのだが、出不精だからなのか、そのときもつくば市までは足を運ぼうとしなかった。そのせいで、秋葉原から乗り込んだつくばエクスプレスの車中では、「筑波研究学園都市」とか「万博記念公園」など、思いつく限りの“つくばキーワード”をかき集め、つくば市の勝手なイメージをどんどん膨らませていった。しかし、いざ到着してみると、自分勝手なイメージをよそに、そこにはモダンな建物が立ち並び、イチョウが黄色く染まったことも相まって気品と風格に満ちた雰囲気が漂っていた。「このような場所で大会に参加できるなんて」と興奮したのを今でも覚えている。

つくば駅を出ると、そこでは大会スタッフの方が案内板をもって立っておられた。ここでひとつ目を引いたのが、スタッフの方々のあいさつの仕方である。両手を前に重ね、両足をそろえて腰から約30度の角度

までゆっくりと曲げ、そこにあいさつ言葉を添えた姿勢は、まさに日本の伝統文化であった。大会当日までに何度も練習を重ねられたのだと思う。早朝からそのようなあいさつをいただいたおかげで、大会中はとてもさわやかな気分でいられることができた。

今大会では、あらかじめ郵送されていた参加証をもってくれば受付はパスできるというシステムになっていた。たぶん、受付の混雑を緩和するための策であろうが、こうした細かな工夫にこそ、大会運営にかかわった方々のご苦勞が見え隠れしていると感じた。自分が大会運営に携わる機会があれば、是非とも参考にさせていただきたいと思う。

さて、大会一日目は残念なことに午前中から天気が悪くなり、午後には大雨となってしまった。ただ、今大会はポスター会場や口頭発表会場、それに特別シンポジウムの会場が「つくば国際会議場」というひとつの大きな建物の中にまとまっていたため、会場間の移動が手間に感じるということはなかった。会場内は息をのむほど大きな吹き抜けのつくりになっており、各階に伸びた長いエスカレーターが開放的な雰囲気の演出に一役買っているようだった。

今大会はどちらかというと口頭発表やワークショップがメインとなり、そこにポスター発表が添えられたような日程になっていると感じた。ポスター発表は大会二日目に集中し、口頭発表とワークショップが大会二日間を通してコンスタントに配置されていたからである。このため、ちょっとした空き時間を見つけてはすぐにポスター会場へと足を運ぶ自分にとっては、そのせわしない性分のせいで、一日目の日程が少々物足りなかったようにも感じた。しかしその分、一日目は口頭発表やワークショップを集中的に満喫できたので、その意味では、こういった日程の組み方も悪くはないと思った。

すべての研究発表を通して思ったのは、やはり震災関連の研究発表が目立ったことである。大会準備委員会による企画シンポジウムでも「東日本大震災において社会心理学者はどう活動したか」と題した発表が行われ、活発な議論が交わされていた。震災後まもなく2年が過ぎようとしている。

しかし、時間の流れとともに大地震という未曾有の災害は人々の記憶から薄れるどころか、むしろ以前にも増して関心が高まっているようにも思う。発表件数の多さや企画シンポジウムで掲げられたテーマは、まさにそのあらわれではないだろうか。

シンポジウムで先生方からの新たな提言や知見に耳を傾けている最中、休憩室で久しぶりにお会いしたT大学のK先生からうかがった震災のはなしを思い出した。幸いなことに、私は震災当日、東北地方から離れていたため被災はまぬがれたものの、K先生はまさに「あの日」に居合わせた当事者のひとりであった。「僕たちにとってあの日は特別な日でもなんでもなく、もはや日常生活の一部なんですよ」とK先生は言う。「だから、落ち着くまでは(気持ちの整理がつくまでは)ということだろうか) そっとしておいてほしいという部分もあるんです。」

社会心理学という学問分野は、その名の通り、社会で起こった出来事を人がどう理解するかに焦点を当てるものである。そのため、人は災害時にどんな行動をとりやすいか、そのときどんなストレスを受けやすいか、そのストレスを低減するためにはどうすればよいか、などをこれまでの知見にもとづき解析し、これをメッセージとして被災地に届けるという作業は、社会的還元という意味でも確かに意義深いことだと思う。けれど、その一方で、そうした作業が被災された方々の今にどれだけ役に立つだろうとも考えてしまった。被災された方々の多くは財産という財産をすべて失い、今は生活を立て直すための経済的基盤をつくることで手一杯だからである。社会心理学に携わる私にとって、震災を目の当たりにしたときに感じた未熟な使命感は、それはそれで大切だと思うけれど、被災された方々のご苦勞を察してじっと見守ることも、被災者支援に必要なことではないだろうかと感じた。シンポジウムで話題提供された先生方のはなしに触れながら、このようなことが頭を駆け巡っていた(大会印象記というより復興支援への提言記になってしまいそうだ……)。

もちろん、震災関連以外にも、無意識研究や感謝の研究、それに私の専門分野である怒りの研究など、知的好奇心をそそる発表が数多くあり、今大会はこれまで以上に収穫が多く充実したものであった。大会が

こうして盛況のうちに幕を閉じたのは、研究発表を綿密に準備してこられた諸先生方のおかげであることはもちろんだが、それ以上に、今大会の成功は吉田富二雄先生はじめ、大会運営にかかわられた数多くの先生、ならびに学生の方々のご苦勞あつての賜物だと思う。この場をお借りして心から感謝申し上げます。

最後にどうしても書き添えておきたいことがある。お恥ずかしいことに、じつは私は休憩室大好き人間である。そのため、一にも二にも、大会に参加すればまずは休憩室に足を運び、どんなサービスがあるのだろうと（差し出がましいようだが勝手に）評価するのが常であった。今大会の休憩室はというと……つくば名物のお菓子や煎れたてのコーヒー、無線LANの完備、ノートパソコンの貸出、清潔感あふれる室内、そしてスタッフの方々の笑顔を絶やさないう対応など、ひとときの安らぎを提供してくれるに相応しいきめ細やかなサービスが随所に垣間見えた。そのため、満点以上の点がついたことは言うまでもない。

（うへはらしゅんすけ・東北大学）

■ 第53回大会実施概要報告

期日：2012年11月17日～18日

会場：つくば国際会議場

準備委員長：吉田富二雄（東京成徳大学応用心理学部）

事務局長：松井豊（筑波大学人間系）

事務局幹事：岡田昌毅（筑波大学人間系）、湯川進太郎（筑波大学人間系）、藤 桂（筑波大学人間系）、川上直秋（筑波大学人間系）

1. 参加者数：690名（予約参加者488名、当日参加者198名、招待参加者（名誉会員等）4名）
2. 発表件数：420件（発表申込件数：460件）
3. 発表取り消し：3件

口頭発表 21-01 佐々木 美加（明治大学）
社会的違反者の感情表出と解説者の情動知能が和解動機に与える影響

口頭発表 17-04 川角 公乃（学習院大学）
東日本大震災における東京近郊に住む大学生の帰宅行動と情報収集について

ポスター発表 P04-19 花尾 由香里（東京富士大学）
対象者の特性に応じたリスクコミュニケーションの開発～食品のリス

ク認知と購買傾向による消費者分類の検討～

■ 名誉会員推戴の記

青池慎一

2012年11月17日（土）に開催された日本社会心理学会第53回大会総会において、日本社会心理学会名誉会員の称号を賜わり、まことに光栄のこととっております。そして、それと共に、私に対してこのようにしていただいたことに、日本社会心理学会と会員の皆様、心より深く感謝申し上げます。

私は2012年6月の誕生日で満70歳となり、古稀をむかえたわけではありますが、今さらのことのように、年月の過ぎ去ることの速さに感慨を覚えております。私の記憶に誤りがなければ、私は1966年度もしくは1967年度に日本社会心理学会に入会させていただき、以来会員として所属させていただいてまいりました。入会させていただいた当時、私は大学院修士課程の院生であったのですが、学術研究団体である日本社会心理学会に入会させていただいたことに大きな緊張を感じたことが思い出されます。そして、日本社会心理学会におけるさまざまなことが懐かしく去来してまいります。私の研究領域は、イノベーション普及過程研究やコミュニケーション（マス・コミュニケーション）研究ですが、日本社会心理学会や日本社会心理学会の先生方、院生の皆様は、私の研究活動、そして教育活動に大きな刺激や研究発展上の示唆を与えて下さったのです。日本社会心理学会における数多くの先生方や院生の皆様との交流が楽しいものであり、多くのことを学ばせていただいたことが思い出されます。

70歳になったと言っても、私の場合、研究の上では、未完成のものを多く残しております。先般、ニュースの普及過程に関して論じた著書を出版いたしました。さらに論じていかなければならない新たな研究課題も見出され、浮かび上がってきております。微力でいささか高齢の私ではありますが、今後とも研究活動を少しでも前進させたいと思っております。その歩みは遅遅たるものとなるでしょうが、努力していきたいと思っております。

少しばかりは、学会に貢献させていただいたようですが、それよりも多くの、もっと多くのものを日本社会心理学会は、私に与えて下さったのです。今後とも、日本社会心理学会の名誉会員の名に恥じないよう努めていきたいと思っております。本当にありがとうございました。重ねて感謝申し上げます。

（あおいけんいち・成城大学）

真鍋一史

今回、はからずも、日本社会心理学会の名誉会員に加えていただくことになり、光栄に思うとともに、同時に、面映ゆさも感じています。それは、社会心理学という discipline に対して、私は何か「貢献」することができたのだろうかという思いがあるからです。

かつて、ある本の自己紹介の欄で、つぎのように書いたことがあります。「学生時代、大学で法学部と新聞研究所に籍を置いたことから、政治学と社会学と心理学の境界領域に関心をもつようになる。人間科学とか行動科学とかいう言葉の魅力的な響きに惹かれていった。」このような私の歩みを、より具体的にいうならば、社会心理学にかかわることでは、つぎの二つの出来事がありました。

その一つは、木下富雄、三宅一郎、間場寿一の三先生による『異なるレベルの選挙における投票行動の研究』（創文社、1967）との出逢いでした。とくに、この研究のなかで、名誉会員の木下先生が、L. Guttman の態度測定法を下敷きに、政治意識や投票意図について独自の分析枠組みを展開された部分は、私にとっては、きわめて新鮮な驚きでした。後年、まさにその L. Guttman 先生のもとで、「ファセット理論」と「データ解析法」を学ぶことになりましたが、その淵源は、いまふり返ってみると、じつはこのへんにあったように思われます。

もう一つは、故南博先生との出逢いでした。それは、M. Sherif と C.W. Sherif 編『学際研究』（鹿島研究所出版会、1971）の翻訳・出版の共同作業においてでした。どのような経緯からか、南先生の一橋大学の研究グループに加えていただくことになり、米国諸学会の「学際」的な研究動向の日本への紹介という知的活動にかかわることができました。いみじくも、そのテーマが「学際

研究」。大学の学部学生の時から、政治学、社会学、心理学、マス・コミュニケーション／異文化コミュニケーション／広告などの研究諸領域において、すでに

multi-disciplinary な「社会化」を経験してきた私にとって、この出来事は、私自身の研究スタイルを自覚する大きな契機となりました。そして、このような「境界人」としての方法論的な立場は、基本的なところでは、いまま私のなかで継続したものとなっています。

以上のような、出逢いが出発点となり、その後、社会心理学、社会学、政治学に軸足を置きながら、質問紙調査と内容分析の技法を用いて、国際比較の視点から、「政治文化」「政治行動・政治関心・政治情報」「ナショナル・アイデンティティ」「国際イメージ・国際コミュニケーション・国際広告」「価値観と宗教意識」「幸福・満足・ウェルビーイング」「日本人論」「言語・日本語・日本語教育」「国際交流事業評価」など、さまざまなテーマに取り組んできました。

こうして、「自分史の試み」ともいうべきものをおして、いま、ひしひしと感じていることは、私がこれまで社会心理学から受けてきた「恩恵」には、じつに計り知れない大きなものがあるということです。社会心理学という discipline に対して、そして日本社会心理学会の皆様に対して、心から感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

(まなべかずふみ・青山学院大学)

2012 年度日本社会心理学会賞

第 14 回選考結果のお知らせ

今年も例年にならった方法により論文賞および出版賞の選考が行われ、下記の各論文と著作が授賞対象として選出されました。

■受賞者

○優秀論文賞

『人間関係の選択性と態度の同類性: ダイアド・データを用いた検討』 石黒 格 (第 27 卷 1 号掲載)

研究目的の設定から変数の選定、そして調査の実施に至るまでの、議論の緻密さが高く評価された。調査手法や分析方法も高い水準にあり、総合的に最も優れた論文として選出された。社会的ネットワー

クの実証的検討としての貢献が十分に認められる研究である。

○奨励論文賞

『集団間葛藤時における内集団協力と頻度依存傾向: 進化シミュレーションによる思考実験』 横田晋大・中西大輔 (第 27 卷 2 号掲載)

集団間葛藤の状況下での内集団協力行動と、いわゆる「ただ乗り」問題に対して、進化シミュレーションという方法を用いてアプローチしようとした試みの独創性が高く評価された。今後さらに研究の進展が期待されるという意味も込められた選考結果となった。

『情報の非対称性を伴う二者関係での予期と行動の相互支持過程の検討』 小杉素子 (第 27 卷 3 号掲載)

情報優位者による情報隠しの弊害という現実的問題に迫るにあたって、これを実験研究によって検証しようとした、そのチャレンジ精神が評価された。研究実施に要したであろう労苦をいとわない研究姿勢も、多くの選考委員から好感を得た。

○出版賞

『退職シニアと社会参加』 片桐恵子 (著)

東京大学出版会

今日の日本社会や経済の問題を議論するにあたって看過できない退職シニア層の問題を、社会参加活動をテーマとした調査データに基づいて検討している。「社会参加位相モデル」を提唱し、シニア層を対象としたインタビュー調査を基にこれを量的・質的の両面から検討するという研究方法と成果が持つ、理論的および実証的意義が高く評価された。

○選考委員会

委員長: 唐沢 穰

委員:

理事: 青野篤子*、亀田達也、木村堅一、斎藤和志*、古川久敬*、村本由紀子

会員: 有馬淑子*、広瀬幸雄、村上史朗 (以上編集委員)、敷島千鶴 (過去の受賞者)

*は出版賞選考小委員会委員

(文責: 唐沢 穰・編集担当常任理事)

■受賞者の声

優秀論文賞を受賞して

石黒 格

この度は、大変に名誉な賞をいただきましたことに、感謝を申し上げます。審査に関わった先生方には、ご多忙にも関わらず、拙著を精読し、高く評価をいただいたことにお礼を申し上げます。

この論文は、我々心理学者が当然のものとして理解している現象を、より広い社会的文脈、特にソシエタルな制約の中で再検討するという試みのひとつでした。同時に、複数の学問領域 (といっても、社会心理学と重複すること著しい社会学的ネットワーク研究ですが) のアイデアを組み合わせることで、どちらの領域にも貢献する研究を生みだす取り組みでもありました。

選んだのは類似性-対人魅力仮説です。このモデルは、社会心理学者にはおなじみですが、社会学的なネットワーク研究では、「類は友を呼ぶ」現象が同類性原理として研究対象となってきました。しかし、社会学領域では、同類性原理は類似他者の選好だけではなく、ソシエタルな環境の制約、特にエスニシティや社会階層などによる、生活世界の分断からも生じていると考えてきました。その立場からすれば、類似性-対人魅力仮説だけから現実の人間関係を考えることは、すべての社会構成員がつきあう相手を自由に選んでいるという、ありえない前提を置いて現象を考えるのに等しいのです。

これは、重大な問題だと本研究では考え、本当に、Byrne らが実験で明らかにしたように、我々が類似した態度を持つ相手と好んでつきあっているのか、つきあえているのかを明らかにしようと思いました。結果として、一定程度、態度の類似性に基づく選択が、現実場面の中でも起きていることが明らかになりました。

さて、この研究自体は、純粋に私の学問的関心のために書かれました。執筆の動機は個人的なものです。しかし、せつかくこのような場をいただいたのですから、個人的な関心の落とし子から、あえてメッセージ的なものを引き出すことにしましょう。それは、単純で、言い古されたものです。社会心理学者は、現実の社会と人々を忘れてはならないと言えよいでしょうか。

近年、文化心理学や進化心理学といった学問分野、あるいは社会的適応という概念に基づいた研究が大きな潮流となっており、これらの中には、あたかも社会の構成員が等しい立場を持ち、等しい社会環境（ソーシャル、ソシエタルの両方の意味で）に対峙しているかのような議論が数多く見られます。個人の行動が自由だとか、すべての個人の選択肢と利得構造が等しいといった前提を置くモデルはそのひとつの現れであり、ソシエタルな環境の制約を無視しがちです。「日本の文化」という大枠などからえ方も、社会階層に関わる研究知見からは考えられません。

実験室で、あるいは理論的な空間でならばともかく、ヒトはソシエタルな環境の中で生きており、その環境は、個々人の選択肢を制限します。実験室で確認された心理学的事実が、実験室を離れた現実の中でインパクトをもちうるのかどうかは、思考と実証の両輪で確認されなくてはならないでしょう。研究上の道具としてはよくとも、現実を持ち出す際には、研究上の前提が、現実においてなにを意味しているのかを、常に確認していく必要があるでしょう。

私個人は、こうした現実に懸念を持っています。しかし、同時に、利己的にはチャンスを感じます。そこから少し離れたところに立つ身としては、そうした点の検証に、自らの立ち位置を見つけることが可能だからです。本論文の受賞で、そうした仲間がさらに増え、私の利己的な期待が踏みつづされることを期待しております。

(いしぐろいたる・日本女子大学)

奨励論文賞を受賞して

小杉素子

このたびは、名誉ある社会心理学会奨励論文賞を賜りまして、大変光栄に思います。お忙しい中、ご審査くださった先生方にも深く感謝申し上げます。

本研究は、行政や企業による事故隠しやデータ改ざんなどの情報操作がたびたび発生するのは何故なのかという素朴な疑問からスタートしました。情報操作が発覚した場合、行政や企業は大きなダメージを負い、その回復には多大なコストと時間がかかります。そのような先例が数多くあるにも関わらず、社会からネガティブな反応が返っ

てきそうな情報を提供する当事者の立場になると情報操作を行ってしまう行政や企業が存在しています。情報操作が発覚すると、多くの場合、隠蔽体質や風通しの悪い組織風土に問題があると見なされ、再発防止として組織の体質改善が求められます。本研究では、情報を公表した場合に情報の受け手から強いネガティブ反応が返されるかもしれないという情報提供者の予想に基づく情報操作と、もし情報操作がなされていた場合に被る損失を最小にしようとする受け手の反応とが、互いの相手の行動に対する予測を維持しあっている構造を示しました。つまり、情報操作は提供者側の組織風土や心がけからのみ生じる問題ではなく、提供者と受け手の互いの疑心暗鬼という状態から生み出され維持されることを示しました。

企業不祥事などの社会問題は、事例研究として詳細に調べられることが多いですが、それぞれ事例は固有の歴史や背景、関係者の関係などの要因が複雑に絡み合っており、事例に共通したメカニズムが見えにくくなっています。そこで、共通の重要と思われる要素以外を排除したかたちで、情報操作が発生する基本的なメカニズムを示すことができないかと考え、実験研究を行うことにしました。もちろん、実験では様々な要素を捨象しているため、現実の社会問題にどのように対処したらよいのかという知見を直接引き出すことはできません。しかし、多くの要因が複雑に絡み合った社会問題を解きほぐして基本構造を明らかにし、解決のために重要な要因は何か、どこから手をつけるべきかを知る手がかりを得るには、実験はひとつの有益な手法ではないかと考えています。今回の受賞は、そのような研究の方向性を評価していただいたものと大変嬉しく思っております。ここをスタートラインとして、より一層精進して研究に取り組んでいきたいと思っております。

本論文は、私が北海道大学文学研究科の博士課程に在籍中に実施した実験研究をまとめたものです。問題意識の明確化から実験の設計・実施に至るまで、指導教官である山岸俊男教授の熱心なご指導と、ゼミのみなさんの多大なご協力に支えられ、学術論文にすることができました。また査読者の先生方にも丁寧にご審査いただき、有益なコメントをいただきました。この場をお

借りして、ご指導ご協力いただいた多くの方々に、心より厚く御礼申し上げます。

(こすぎもとこ・電力中央研究所)

奨励論文賞を受賞して

横田晋大・中西大輔

この度は、栄誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。

本研究は、集団間葛藤が激しくなるほど、内集団協力行動および多数派同調傾向が増加することを進化シミュレーションによって検討したものです。シミュレーションの結果、これまで全く異なる適応課題に対応した心理傾向として別々に検討されてきた集団間葛藤時の内集団協力と多数派同調傾向がリンクし、内集団協力を飛躍的に増加させることが示されました。このことは、なぜ集団間葛藤が起こるか、特に、葛藤がいかなる過程を経て激化するかという社会心理学史上の重要な問題を解決する一つの糸口となるのではないかと考えています。

今回、奨励賞を頂いた私どもの論文には、実証データが含まれていませんでした。論文の題名にもありますように、進化シミュレーションは一つの「思考実験」を提供するものです。進化シミュレーションを使えば、天才ならば自分の頭で（あるいは数式一本で）組み立てる論理を数学的貧者（亀田, personal communication）である私たちにも可能となります。進化シミュレーションという手法は、心理学だけではなく、人類学や生物学、政治学などでもメジャーな方法であり、海外でもこの方法を用いる研究者は数多くいます。有名なところでは、2009年にノーベル経済学賞を女性で初めて受賞した Elinor Ostrom です。彼女は数理モデルを立て、実際に市場でデータを取ることでそのモデルの妥当性を検証していました。同じように、日本でも北海道大学の亀田達也教授の研究グループが、90年代から進化シミュレーションと実験を組み合わせたパラダイムによって多くの研究を蓄積しています。確かに、実験や調査、面接などの方法で実証データを重ねていくことは重要です。ただ、心理学、特に社会心理学が“科学”となりきれない一つの原因が、その再現性の無さでしょう。追試をしても、結果が再現されないことが多々あり、その原因は方法にあるのか、理論にあるのかが明らかにならないことがあります。その意味に

において、あらかじめシミュレーションを用いて一つのモデルを作り、そのモデルを比較対象として実験・調査を行うことは、再現性の無さがどこに起因するかを明らかにするヒントをくれます。シミュレーションを用いてモデルを構築し、そのモデルと経験的データと照らし合わせることは、よりデータの理解を広げてくれます。その意味で、今回の受賞は理論研究の重要性が認識されてきたということだと理解しています。シミュレーションは、決して一部の“オタク”たちだけのものではないのです。

最後に、この度の受賞は、私たちの力だけでは成し得なかったものです。この場を借りて、支えてくれた方々に御礼を述べたいと思います。特に、査読者の先生には、感謝の念が絶えません。2年もの間、辛抱強く査読に付き合ってくださいました。そして、査読者の内の1人は、自身でシミュレーションを実際に行った上で真摯かつ丁寧に査読を行っていただきました。その容量は、私たちの論文を超えるほどのもので、私たちは受け取った時には本当にびっくりしました（もちろん、よい意味で、です！）。査読者の方のシミュレーションがあったからこそ、私たちのシミュレーションは、さらに精度の高いものへと昇華することができました。私たちはこの論文の執筆、投稿を通じて、社会心理学会という研究者コミュニティの本当の豊かさを知ることができた思いがします。本当にありがとうございました。

（よこたくにひろ・広島修道大学
なかにしだいすけ・広島修道大学）

出版賞を受賞して

片桐恵子

このたびは2012年度日本社会心理学会出版賞をいただきまして、大変名誉なことと光栄に思っております。選考いただきました先生方に深く御礼申し上げる次第です。本来であれば、授賞式に出席しまして御礼申し上げるべきところ、海外出張中で出席できません、大変申し訳なく思っております。この場をお借りしまして御礼申し上げます。

本書は2006年に書きました博士論文に基づき、アップデートした新しい調査データの分析結果を加えて書き直したものです。内容は退職シニアの社会参加一都会にすむ

サラリーマンたちのその後一をメインにとりあげ、彼らの“社会参加しにくさ”、“地域デビューの難しさ”の現状を把握し、その要因と、社会参加のもたらす結果を社会調査データとインタビュー調査を用いて量的質的方法を併用したミックスメソッドを用いて掘り下げた内容になっています。

最近とかくマスコミで退職シニアの“地域デビュー”や“定年後の生き方”が取り上げられますが、それはやはりそれが難しいことの証左。データでみましても2002年と2008年の間に調査地点の練馬区のシニアの社会参加率は大きな低下をみせ、とくにこれまで社会参加が盛んであった女性たちの急落がめだちました。その間に高齢者の雇用に関する法律が変わって60歳以上の雇用延長が進み、働き続ける人が増えたことや、女性の就業率が上がったことなど社会制度的要因もありますが、団塊世代を機に高齢者の心理が大きく変わったことも要因の一つであると思われます。今回はとりあえずここで筆を置きましたが、このテーマは世界のベビーブーマー世代、アーバニゼーションに伴う問題や60歳代の働き方など様々な方向に展開しうるテーマを含んでおり、今後それらの方向に研究を発展させていきたいと考えております。

社会心理をでましたのち、現在は主に社会老年学分野の研究に携わっておりますが、これは高齢者を対象にした学問ということで本来的に学際的なアプローチをとる分野です。また高齢化に伴う問題はそれぞれの国や地域、文化特有の問題もありますが、人間のエイジングという共通したテーマでもあり、互いの知識や経験を共有することで、高齢化問題によりよく対処することが可能であるため、国際的な共同研究を行う機会も多い分野になります。

とかく介護や医療など社会制度や、インフラなどハードな分野からのアプローチがもっぱら取られてきた中で、その中に生きる人間の心を扱う社会心理学の必要性が最近とみに認められるようになってきたように感じています。

現在5カ国の研究者とともに後期高齢者の社会的孤立の研究や、香港・アジア・日本の3カ国で街の歩きやすさと健康の比較の研究などに従事していますが、社会心理はいろいろな学問の接着剤となりうるような気がしているところです。

社会心理学は若者を対象にしたテーマが多いですが、現在日本の人口の1/4近くを占める高齢者を対象とした研究にももっと目を向けてむけていただくきっかけになればと願っております。

最後に、博士論文を指導していただいた秋山先生や池田先生など東京大学大学院社会心理の諸先生といろいろのアドバイスを下さった院生のみなさま、会うたびに出版をと叱咤して下さった箕浦先生、研究生活を支えて下さった日本興亜福祉財団・日本興亜損害保険㈱のみなさま、また、なにかというと自信を失い悶々とする私を励まし、また初めて描いた絵で自分の本の表紙をかざるなどというお目汚しを笑ってご寛恕くださった東京大学出版会の編集者の方に、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

（かたぎりけいこ・日本興亜福祉財団社会老年学研究所）

■2012年度若手研究者奨励賞の選考

今年度の若手研究者奨励賞には44件の応募があった。各審査委員は、利害関係のある応募者を除くすべての申請に対して得点を与え、これを集計したものを基礎資料として、入念な意見交換と審議を行った。その結果、次の4名の方を受賞者として決定した。

○北梶陽子 北海道大学大学院文学研究科 修士課程2年 「社会的ジレンマ状況における監視可能性の低い情報公開のもたらす効果」

○小松瑞歩 北海道大学大学院文学研究科 修士課程1年 「善行を罰する社会一関係流動性が突出協力者に対する評価と協力行動の隠蔽に与える影響」

○末吉南美 関西学院大学大学院文学研究科 博士課程前期課程1年 「集団による負の資源分配におけるの公正感認知と交渉過程 —放射能汚染がれき受け入れ問題を題材として」

○中分 遥 上智大学大学院総合人間科学研究科 修士課程2年 「なぜ有能な個人を選ばないのか? : 社会的学習におけるベストメンバー戦略の再検討」

講評

受賞した4件はいずれも、研究の意義や実行可能性、そして将来性を高く評価されたもので、審査委員全員から安定した評価を得たものであった。他方、選考委員会として最大限の努力をしたが、これまで毎年5名に対して授与されるこの賞の対象として4名しか選考できなかつたという事態が生じた。研究目的の記述において論理的な飛躍があつたり効果的なアピールのための工夫がたりなかつたり、方法が目的にそぐわなかつたり実現性があやぶまれるもの、研究の独創性・意義の記述がまとはずれであるものなど、研究に対する意欲は汲み取れるものの、残念ながら選に漏れた応募が多数あつた。惜しくも受賞を逃した応募者の皆さんは、ぜひ計画を練り直した応募用紙を吟味しなおして再びチャレンジしていただきたい。来年度以降の応募を考えて

いるみなさんには、今から十分な時間をかけて準備を進めていただいた上で奮って応募いただきたい、というのが選考委員一同の願いである。

応募の中で、現実的な社会的問題と関わる研究テーマが注目を集めた。他方、見かけは地味でも、綿密な研究計画に基づいて基礎的な問題を誠実に追いかけてようとする研究に対しても、相応の評価がなされていた。

特記すべき事項として、昨年までにはほとんどなかつたケースとして、期限内ではあるが差し替えを希望した者1名、期限を過ぎて送付してきた者2名、期限内に提出したが期限後に差し替えを希望した者1名、添付ファイルなしで送信してきたもの1名、所定の様式を用いずまた必要記載事項が完全でないファイルを送付してきた者1名、研究題目が空欄の者1名、合計7名つまり

44名中約16%が何らかの不備不正提出であつた、ということがあつた。さらに、提出日が空欄のものなど細かな不備まで含めると、約2割は不完全な提出であつた。選考委員会ではこれらを一応受け付け第1次審査の際(各選考委員が独自に評価)は評点をつけたが、対面での第2次審査の会議では協議の結果、授賞対象としないこととした。なお、第1次評点の得点上位者にはこのような者はいなかつた。

若手研究者を奨励することを趣旨とした賞であり、あまりに多くのことを望むのは酷かもしれないが、これを研究したいという意欲が他者にもきちんと伝わり評価してもらえるように細部にまで神経を行き届かせた申請が次年度以降も寄せられることを期待したい。

(文責：学会活動担当常任理事 遠藤由美)

東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか

(その6)

社会心理学者はどう活動できるのか～震災から1年半後の報告と提案

三浦麻子

東北地方太平洋沖地震の翌年も終わろうとしている。しかし、東日本大震災とその余波は未だにわれわれに大きな影響を与え続けている。いやむしろ、激甚かつ複合的な災害の影響が予想もつかない形で今後も立ち現れてくる可能性もたらす社会的不安はより高まっているかもしれない。

個人的には、よく晴れた穏やかな(そして、差し迫つた仕事のない)金曜の午後になると、以前は「このまま週末に突入できるなんてなんて私は幸せなんだろう」と多幸感に浸っていたのが、3.11後はいつもあの日の、多幸状態から真逆さまに突き落とされた時のことを思い出すようになった。自分自身の足元は微塵も揺れなかつたにも関わらず、マスメディアから発信され、またソーシャルメディアで共有された「リアリティ」は、圧倒的な衝撃をもって記憶に深く刻まれたのである。そしてそれと同時に必ず考えるのは「私はあれ以来何ができてきているか」ということ。こうしたエピソード記憶の想起は決して心理・生理的な快を伴わないが、爾来の自らの歩みを確認し、先への気持ちを新たにするという意味では「悪くない」機会である。本稿では、そんな私の最近の震災に関わる研究活動の現状—東日本大震災ビッグデータワークショップ Project311での研究発表—をご報告し、その上で現在考えていることを述べる。

東日本大震災ビッグデータワークショップ Project311は、グーグル株式会社と Twitter Japan 株式会社の発案により、震災直後の1週間に発生したデータを協賛各社(NHK、朝日新聞、本田技研

工業など8社)が提供し、それらのデータの分析によって今後起こりうる災害に備えて何ができるかを議論することを目的として開催された。ビッグデータとは、その名の通り莫大な量の、かつ構造化されていないデータのことである。今回提供されたのは、オンラインコミュニケーション、情報検索行動、マスメディアによる報道、交通行動など多岐にわたる人間の行動データで、記録されていたものがすべて、ただしグチャグチャになって詰め込まれた宝箱を想像していただければよい。私と共同研究者(小森政嗣さんと松村真宏さん)が提供を受けたのは、当該期間に投稿された日本語による全ツイートで、30GBほどもあつた。数個のファイルに分割されてはいたがもちろんExcelはおろかテキストエディタでも開くことができないサイズである。データ処理はすべて共同研究者に委ねたが、全体のわずか0.15%にあたる発信位置情報(ジオタグ)の付されたツイートのみに絞って感情語(怒り・不安・悲しみ・驚き)の出現頻度をカウントし、被災地からの距離に応じた4群に分類して集計するだけで数週間を要した。

データ提供開始から1ヶ月半後(10月28日)の報告会では50件の発表があつたが、そのほとんどは情報学分野のもので、心理学者の参加はわれわれだけであつた。行動データの宝箱が、中身を確認することさえできれば心理学者の研究対象として格好の素材であり、有為な貢献の可能性のあることは、報告会の発表タイトルを眺めていただければおわかりになるだろう。ただし開けるには(残念ながら心理学者が身につけていることの少ない)技術を要するため、それを持つ人々との協働が必須となるし、これまでのrelatively smallかつ構造化されたデータに適用してきた分析手法やモデルが容易には通用しないこともあろう。とはいえ、

震災関連に限らず「ビッグデータの時代」は決してわれわれにとって無縁な世界の話ではなく、むしろ新しいデータの形として注目されてしかるべきではないだろうか。是非多くの心理学者にビッグデータへの挑戦に関心を持っていただきたい。

このビッグデータワークショップで期待されていたのが、地震直後の人間行動を知り、次の災害に備えることに資する研究であった一方で、長期的かつ継続的に被災者の支援に関わることも心理学者が取り組むことのできる重要な課題の1つである。日本社会心理学会第53回大会シンポジウム「東日本大震災において社会心理学者はどう活動したか」では、こうした実践のうち3件が紹介され、私は指定討論者を仰せつかった。話題提供者(水田恵三先生、渥美公秀先生、松井豊先生)からなされた報告はいずれもとても重い内容で、被災者や震災の現場に関わる方々と協働して直接的に復興に取り組んでおられる方々に心からの敬意を抱かせるものであった。

この上に何を討論せよというのだろうと随分悩んだ挙げ句、当日は3つの質問をさせていただいた。そのうちの1つが「被災地に入り込まない心理学者はどう活動できるのか」であった。社会心理学は現場に入らなければ研究が成立しないという学問ではなく、手法として現場に入ることを旨とする社会心理学者はそう多くはない。しかしことこのたびの震災に関しては、同じ国に住む人々がこれだけ苦しんでいるというのに、アームチェア社会心理学者でいることは許されるのか。「何かできる」と思うことそのものが不遜ではないのか。震災について研究していると一方では言

いながら、常に負い目のようなものを感じていることについて、忌憚のないコメントを伺いたかった。いや、もっと有り体に言えば「あなたのしていることもそんな活動になりえますよ」と背中を押してもらいたかった。そして実際、皆さんからそうしていただけのように感じている。

ワークショップ参加とシンポジウムでの議論を経て感じたことは、震災に際してわれわれの携わるべき研究テーマやデータは数限りなくあるということと、それらに取り組む際には個々の研究者の努力に委ねるだけではなく必要に応じて学際的に連携しながら束になってかかることも必要なのではないかと、ということである。具体的には、シンポジウムの際にフロアから水口禮治先生がご意見くださったように、日本社会心理学会として二次利用可能な震災関連データを集約・共有し、あるいは一次データを自ら収集し、その提供を受けた諸会員による研究成果を募るコンペを企画することはできないだろうか。一次データの収集にはJGSS(日本版総合的社会調査)のように会員から課題を募ることもできるだろう。得られた成果を学会として公開すれば、学術界・社会両方への有意な還元となるだろう。

「東日本大震災を乗り越えるために：社会心理学からの提言と情報」サイトは、「これまで」の社会心理学研究の知見を紹介し、活用してもらうことを目指したものであった。ここから一步踏み出した震災との関わり方として、あらゆる社会心理学者が「これから」活動できる企画を是非ご検討いただければと願っている。

(みうらあさこ・関西学院大学)

若手会員、声をあげる

腹を割ろう、議論をしよう(2)：院生リーグ参加記

平島太郎

前号の会報にて、大阪大学・藤原健さんによる院生リーグのお誘いがありました(前号、「腹を割ろう、議論をしよう：院生リーグへのお誘い」を参照)。私は「走る社会心理学者」ではありませんが、前号からのバトンを受け取り、院生リーグの参加記をしたためたいと思います。この参加記では、初めて院生リーグで発表を行った経験を踏まえた一参加者としての感想に加え、これまでの院生リーグへの参加も含めた全体的な感想も記したいと思えます。

今年度の院生リーグは、社会心理学会の前日、秋葉原駅の目の前という、研究会後の筑波へのアクセスも抜群の好立地にある首都大学東京秋葉原サテライトキャンパスにて開催されました。ふだん見慣れない立派なビルを見て、「やっぱ東京はでらすごいところだがや〜」と使ったこともない名古屋弁をつぶやきつつ、会場となる部屋に向かいました。全国各地から集まった院生の数は、昨年を上回る80名超(!)。会場は議論が始まる前から熱気を帯びていました。過去3回、院生リーグに参加しましたが、今回の規模が最も大きかったように感じます。発表件数は12件ののぼり、その内容も個人の認知過程から文化、さらには動物行動学と、非常に多岐に渡っていました。現在の社会心理学の研究領域の裾野の広さを感じさせるものでした。

さて、私は「態度の両価性が社会的適応に及ぼす影響」というタイトルの研究を発表させていただきました。発表内容は、同じ対象についてポジティブ・ネガティブの両方を含む態度を持つことが、態度対象との繰り返しの相互作用が期待できる状況において、どのように個人の適応価を高めるか、といったものです。今回の院生リーグでは、2つの目的を持って発表に臨みました。ひとつは「態度の両価性」という概念について知ってもらい、興味を持ってもらうこと。もうひとつは、最近(発表の1ヶ月前)、研究のモデルを大きく変えたので、今後の研究を進める上で、おもしろい研究になるようヒントとなる意見をもらおう、というものでした。実のところ、あまり固まっていない話を院生リーグで発表する、ということに対して非常に両価的な態度を持っていました。しかし、いざ発表をしてみると、今後の方針についての建設的なコメントや、これまで見落としていた基本的なポイントについてご指摘を頂くことができ、とても有意義な発表になりました。ふだん自分が所属する大学で過ごしているだけでは得られない観点からの意見を伺うことができたのは、さまざまなバックグラウンドを持つ方が集まる、院生リーグならではのことだと思います。拙発表を聞いてくださったみなさま、ありがとうございました。

発表の感想はこの辺にして、その他の発表の様子についても書きたいと思います。月並みな感想になってしまっていますが、いずれのセッションでも忌憚ない議論が行われていました。立ち見が出

るほど人の入りのあったセッションもあり、クリティカルな議論が繰り広げられていました。また、学会発表のセッションでは、なかなか質問をしにくいこともありますが、修士課程の方も積極的に発言していた姿が見られたのが印象的です。「若手の中の若手」まで含めて議論ができるのは、まさに院生リーグの醍醐味だと思います。

非常に熱気がこもった空間で、名実共に「若手の熱気」を感じられた院生リーグでした（私は発表中も発表後も汗が止まりませんでした）。その後の飲み会では、流れた汗を補給すべく、美酒を嗜み、研究会では聞けなかった研究のあれこれや研究室事情のあれこれを、あれやこれやと語らい、とても楽しいひとときを過ごすことができました。

さて、今回、参加記を書くにあたり、これまでの院生リーグへの参加を振り返ってみました。その中で、院生リーグの良さとして感じたことは2つあります。まずひとつに、異なる人間観に触れられるということです。前号の記事の中で、藤原さんが院生リーグの感想として「大学が違うだけでこんなにもテーマとアプローチが違うものか」ということを述べられている通り、院生リーグでは、ふだんのゼミの議論とは異なる観点からの意見を聞くことができます。初めて参加した学部4年生のときは、「いろんな意見があるんだなあ」くらいにしか感じていませんでしたが、学年を経るにつれ、「いろんな意見」の背後にある人間観の違いがわかるようになってきました。研究を進める上で、自分の研究の立ち位置を明確にすることは重要な課題だと思います。自分はどのような立場でどのようなアプローチによって、人間や社会を理解しようとしているのかを自覚するためのキッカケになるという点に、院生リーグの良さがあると思います。

2つ目は、院生同士のネットワークができるという点です。名古屋は、関西にも関東にもアクセスがいいといえますが、逆にいえばどちらからも離れています。社心のメールニュースで、おもしろそうな研究会の案内がきても、開催地が関西や関東の場合、物理的な要因で、参加するハードルがやや高くなってしまいが実情です。そのため、特に地方大学の院生にとって、院生リーグは、他大学の院生と議論し院生同士のネットワークを作る貴重な機会となっていると思います。こうしたネットワークは、直接的な研究上の資源（e.g., 文献の紹介）としてだけでなく、研究のモチベーションを保つ資源にもなっています。

この原稿を読み直してみると、院生リーグという同盟を通じ、切磋琢磨し合える研究仲間と出会えたことは、今後の研究人生を歩む上でかけがえのない財産となるだろうとあらためて実感した次第です。今後も、院生リーグを通じてみなさまの研究が活性化してほしいという願い（活性化していこうという意気）を込め、参加記を終えたいと思います。

末尾になりましたが、この場を借りて院生リーグを運営していただいた方々にお礼を申し上げたいと思います。今回は、幹事の一橋大学・井上裕珠さんを中心として、一橋大学、首都大学東京の院生の方々に準備や当日の会場設営、進行などの運営をしていただきました。ただでさえ学会準備で忙しい中、議論の場をセッティングしていただき、本当にありがとうございました。次回の院生リーグ@沖縄は、京都大学の荻原祐二さんが幹事を引き受け

てくださることになりました。よろしくお祈りします。私も参加させていただく予定です。また来年、多くの方とお会いし、研究やその他の話をできることを楽しみにしています。沖縄でお会いしましょう。

（ひらしまろう・名古屋大学）

北米での留学経験と帰国後の「留学的」ポストドク生活

鬼頭 美江

私は、カリフォルニア州立大学チコ校で学士号、カナダのマニトバ大学大学院で修士号・博士号を取得しました。今年度から日本学術振興会特別研究員PDとして北海道大学大学院文学研究科行動システム科学講座に所属しています。本稿では、留学先の学部・大学院と現在の所属講座において親密関係の研究をしてきた中で感じた雑感について書かせていただきます。

「友人関係や恋愛関係などの親密関係を良好に維持するためには、どのような心理過程・行動が有効なのか?」。一言で言えば、これが私の研究テーマです。現在行っている研究では、友人関係や恋愛関係における心理過程や行動を、人々を取り巻く環境への適応戦略と捉え、様々な社会状況においてどのような心理過程や行動が良好な親密関係を維持するために有効なのかを検討しています。例えば、近年、我が国では、従来のお見合い結婚や職場結婚などのシステムが崩壊し、恋愛関係が「自由化」してきています。皮肉なことに、こうした自由なシステムの下では、望ましい属性を持った異性の獲得をめぐる競争も激化するため、人々は、積極的に自分を異性に売り込んで受け入れられなければなりません。このように恋愛関係の自由化が進んだ社会において、自分にとって望ましい異性と良好な関係を形成するために有効な方法が何であるかについて、現在、理論および実証の両面からの検討を進めています。

親密関係研究は、北米で活発に研究が行われており、多くの国際学会もまた北米で開催されます。このため、留学中は国際学会への参加が比較的容易で、発表も頻繁にさせていただきました。こうした学会発表を通して、この分野における最新の研究を学び、研究手法に関する情報をいち早く手に入れることができました。中でも、留学中、最も有益だったのは、この分野の第一人者である研究者の方々と対面で議論できたことです。

それに加えて、北米は親密関係研究を行う研究基盤が整っている環境にありました。親密関係研究の対象となるのは多くの場合、恋人や夫婦といった恋愛関係にある人々です。北米人は自分の恋愛関係について話すことに対する抵抗が比較的小さく、研究のためのサンプルを集めやすい環境にあります。このことは、親密関係研究を行う上でかなり大きな強みであったと思います。

10年以上の年月を北米で過ごし、親密関係の研究者が複数所属する研究科に在籍していた私にとっては、親密関係の研究者がいない現在の講座に所属することが「留学」のようです。現在の所属講座には、社会心理学をはじめ、文化心理学、進化心理学、神経科学、行動経済学などを専門とする教員の方々がいらっしゃいます。こうしたいわゆる「アウェイ」の状態、日々、自分の研究の意義について自問自答しています。従来、親密関係の研究というのは、社会心理学、社会学、コミュニケーション学を中心と

して、記述的な研究が多く行われてきました。これまで限られた分野内で行われてきた親密関係の分野に新しい視点を取り入れることで、理論的な研究を進め、より一般性の高い理論を構築することができます。こうした多分野の観点から行う理論的な研究は、親密関係研究はもとより、社会心理学以外の研究分野に対してもインパクトのある研究になることが期待されます。こうした目標を達成する上で、多様な学問分野の専門家が集い、新たな知識を生み出すために日々議論を重ねている現在の所属講座は、絶好の場所だと思っています。この環境を生かして、現在、文化心理学

や進化心理学、行動経済学などの分野について積極的に学んでいます。今後も視点を広く持つことを心がけ、「良好な親密関係を維持するためには何が重要なのか？」という、私の研究テーマに取り組んでいきたいと考えています。

以上が、学部と大学院を北米で過ごし、帰国後、北海道大学で研究をする中で感じている雑感です。最後になりましたが、貴重な誌面に記事を投稿する機会をいただき、誠にありがとうございました。

(きとうみえ・北海道大学)

社会心理学会を支えていただいている方々 (その6)

「中央調査社」

事務局長 村尾望

一般社団法人 中央調査社の設立は1954年(昭和29年)です。当時、政府の世論調査は1949年に総理府内に設置された国立世論調査所で実施していましたが、第三者の調査機関に委託すべきであるということになり、政府関係の調査受託事業を行っていた時事通信社の調査室との統合により社団法人として新たに設立されたものです。日本の世論調査は、終戦後に民主主義の基礎としての位置づけを得て報道各社が競って実施するようになりました。時事通信社もいち早く技術の習得に取り組み、全国支社局網を通じて報道用世論調査ばかりでなく、政府関係の統計調査や新聞購読調査、宣伝媒体調査などの市場調査も数多く手がけていました。こうした実績があったことから、政府の企画する調査の実施委託先としての独立した世論調査機関設置の受け皿となり得たようです。

時事通信社の支社局網による実施機構は60年近くを経過した今も基本的に変わず維持しています。約800人の登録調査員によりサンプル数10000人の大規模調査から、特定地区で300人といった小さな調査まで、迅速的確にフィールドワークを行う体制を整えています。

設立当初からしばらくの間、高度成長経済で消費の拡大していく時期には、弊社の受託調査も市場調査が中心で、特に耐久消費財などの普及のスピードと範囲を把握し生産販売計画の資料にするための調査が多かったようです。しかし、80年代に入ると消費社会の成熟化が進行し、市場調査手法は多様な展開を示し、コストとスピードが重視され必ずしもサンプリング理論に厳密であることは求めない傾向となっていく中、弊社の受託の中心は統計的な手法が求められる世論調査や研究調査に移っていくようになり、90年代から次第に学術研究調査の占める割合が多くなってきました。現在は、調査受託のうち5割近くを占めるようになってきました。調査手法の大半は、面接または留置法による訪問調査と郵送調査ですが、電話調査、Web調査、定性調査についても自社内ではなく専門機関への再委託によって受託しています。

昨今の調査実施環境については、訪問調査の場合、回収率の低下として端的に示されているとおりで。これには不在と拒否の増加が主因です。不在率が上昇していることについては労働時間の長期化、不規則化、外食などの生活様式の変化に加え、世帯人

数の減少、単身者、共働きの増加などで家族を介しての協力依頼が困難なケースや、集合住宅のオートロックも増え、本人に依頼するまでに至らないケースが増加していることによります。拒否の増加は、仕事のほかにも余暇活動の活発化などで忙しくなっていることでもあります。調査に協力することの意味合いが理解されにくくなってきたことや、個人情報保護意識、詐欺犯罪への警戒意識の高まりも影響しているようです。

こうした調査協力への障害を乗り越え、なんとか協力度を高めてようと努めているところですが、思うようにはいきません。それでも、内閣府の世論調査をみてみますと一時は6割を切った回収率が、昨今は60パーセントの前半までにはわずかですが回復しています。これには、謝礼の増額、調査主体(委託元)の明示、丁寧な事前挨拶状、調査趣旨の説明資料の提示といった対策の効果が出ているものと思います。

一方、調査対象サンプルの抽出の問題に目を移すと、必要とされる作業期間の長期化の問題があります。対象者名簿の作成は多くの場合、住民基本台帳の閲覧によっております。法改正により2006年から閲覧は原則禁止となったものの、結果の公表前提で公益に資する世論調査や研究調査は許可されますが、申請手続きのため提出書類をそろえる手間や、審査にかかり許可が下りるまでに相当な時間を要するという問題があります。さらに台帳リストの編成は、以前は地番順がほとんどでしたが、50音順、生年月日順など変則的な並びのものが増え、約半数の市町村では地番順でない形となっています。こうしたこともあり、一般的な全国調査では対象者名簿作成まで2ヵ月程度は見込まなければいけない状況となっており以前に比べると2倍くらい長かかっています。名簿作成が終了してから実査に入り回収するまで、郵送調査の場合は対象者に発送し回収を終えるまでにさらに1ヵ月から2ヵ月程度が必要となります。調査を企画される側において、タイムスケジュールについて十分注意されないと、希望の納期には到底間に合わないという事例が生じることがあります。

調査の実施に関してはこのほかにも様々な問題がありますが、統計理論にもとづく科学的な調査手法を基本に、企画から実施、集計、分析まで一貫したサービスをこれからも提供していきたいと考えております。

最後に特徴的な調査活動について紹介をさせていただきます。

①「時事世論調査」

時事通信社が内閣支持率、政党支持率などの報道目的に行う月例調査で、設問は、好きな国嫌いな国、景況観などの継続質問と「食生活」「防災」といったトピック的な項目も入れています。全国2000人に対する個人面接調査ですが、50年以上にわたり、設計仕様を変えることなく継続としている調査として、データ利用の申し込みが時々あります。

②オムニバス調査

もともとは「時事世論調査」を利用して付帯質問を募集し結果を報告する相乗り方式の調査ツールとして運営していました。しかし住民基本台帳や選挙人名簿の閲覧制限により、公表できない質問を含めることができなくなったため、2007年以降は住宅地図で世帯を選ぶエリアサンプリングによる独立した調査として実施しています。パイロットサーベイ、緊急調査や質問の多くない場合など、回収ベースで1300人前後を対象に毎月実施の全国調査として利用されています。また、住民基本台帳抽出によるオムニバス調査も別途、年2回程度実施しているほか、同意を得た対象者についてモニター登録してもらい再度郵送調査や電話調査の対象として利用できるしくみも整えています。

③自主テーマ調査

調査の普及研究とPRを兼ねて、時々、オムニバスのスペースを活用して自主的に設問を設定、結果を公表しています。定期的に継続しているものがいくつかあり、「パーソナル先端商品の利用状況」と「人気スポーツ」は20年以上にわたり実施して時系列の動きを追っています。また、昨年の福島原発事故の後、国民の原発に対する意識を10回連続調査により観測する試みも行いました。これらの結果はプレスリリース、ホームページ、広報誌の「中央調査報」への掲載により公表しています。

以上、弊社の紹介をさせていただきました。社会心理学会様の会報の保存状況を調べてみましたところ、最も古くは1993年1月号でした。実際に賛助会員となりました日付はわかりませんが、少なくとも20年は経過しております。これからも皆様の研究活動の一助になれば幸いと心得ておりますのでよろしくお願い申し上げます。

(むらおのぞむ)

* * * * *

会員異動

(2012年9月29日～2012年12月28日)

■新入会員

《正会員》

・一般会員

山入端津由(学校法人沖縄国際大学総合文化学部教授)、行平真也(大分県農林水産研究指導センター水産研究部研究員)

・大学院生

秋保亮太(九州大学大学院人間環境学府)、中園晴貴(九州大学大学院人間環境学府)、間山広江(明治学院大学大学院心理学研究科)、宮島健(九州大学大学院人間環境学府)

■退会者

榎並純子(物故)、柏木 肇、河口朋広、河野 周、島影麻耶、野嶋栄一郎

■所属変更

鈴木 護(岩手大学人文社会科学部)、五十嵐祐(名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授)、佐藤広英(信州大学人文学部准教授)、小湊真衣(桜美林大学)、相羽美幸(筑波大学医学医療系臨床医学域)、堀田結孝(北海道大学大学院文学研究科)、石井国雄(明治学院大学心理学部助手)、佐藤 拓(いわき明星大学助教)

『社会心理学研究』掲載予定論文

■第28巻第2号(2013年1月刊行予定)

《原著》

井川純一・中西大輔・志和資朗「“燃え尽き”のイメージ：新聞記事データベースの内容分析および質問紙実験による検討」
今在慶一朗・内山博之・今在景子「矯正施設における公正な社会的相互作用と秩序の認知」

《資料》

原田耕太郎「手続き的公正基準としての偏りの抑制と利己的バイアスが公正知覚に及ぼす影響」

小宮あすか・渡部 幹「対人的後悔の表明が被表明者の信頼行動に与える影響」

■第28巻第3号(2013年3月刊行予定)

《原著》

浅井暢子・唐沢 穰「物語の構築しやすさが刑事事件に関する判断に与える影響」
後藤崇志・楠見 孝「自己制御行動がバーンアウトに及ぼす影響：就労者の自律性に着目したパネル調査に基づく検討」

編集後記

新年あけましておめでとうございます。七草の頃、この会報をお届けできるよう、準備しております。これで担当の会報も7本目。この間に、会員の皆様に、会員相互の意見やアイデアや提案や動静をうまくお伝えすることをお手伝いできていれば、とても幸いです。新しい年を迎え、皆様のさらなる飛躍を、また学会会員の相互交流、相互の切磋琢磨を願っております(池)。

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail: jssp-post@bunken.co.jp

掲載料：1件(1回あたり)1,000円
(後日事務局より請求書をお送りします。)